岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　85

赤浜散布地ほか

県営土地改良総合整備
事業に伴う確認調査

1993年3月

岡山県教育委員会

序

岡山県教育委員会では、総社市赤浜、下林、窪木一帯において計画されている県営土地改良総合整備事業の実施に先立って、埋蔵文化財の資料を得て、遺跡の保護・保存と土地改良整備事業との調整を図るため、平成元年度から確認調査を実施しています。本報告に収載した第4年次調査は、その最終年度にあたり、下林・上林地区に所在する下林散布地を対象に、平成4年度の国庫補助を受けて実施しました。

調査の結果、弥生時代と古墳時代を中心とした集落遺跡を3地点で確認し、竪穴住居や溝などに伴って弥生時代から近世にかけての土器・土製品・石器・鉄器等の遺物が出土しました。現在はこの調査結果に基づき、現在関係機関等と保存協議を進めているところです。

本報告書が、文化財の保護・保存のために活用され、また、地域の歴史を研究する資料として広く役立てていただければ幸いと存じます。

最後に、調査および報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員をはじめ、総社市教育委員会ならびに土地所有者等関係者から賜りました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

岡山県教育委員会

教育長　**竹　内　康　夫**

例　言

1. 本書は、岡山県教育委員会が、総社市赤浜ほかにおける県営土地改良総合整備事業に伴い平成４年度国庫補助を受けて実施した「赤浜散布地ほか」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、総社市下林・上林に所在する。
3. 発掘調査にあたっては、文化庁の井上和人文化財調査官、専門委員の鎌木義昌（岡山理科大学理学部教授、岡山県文化財保護審議会委員）・近藤義郎（岡山大学文学部名誉教授、岡山県文化財保護審議会委員）・水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）の各氏から指導・助言を受けた。
4. 発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センター職員桑田俊明が担当し、平成４年４月13日から平成４年５月22日まで実施した。
5. 本書の執筆・編集は、桑田が岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において行なった。
6. 本書に使用したレベルの数値は海抜高である。方位は、第１～３図が真北、他は磁北である。
7. 本書第２・３図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図（総社東部）を複製したものである。
8. 報告書に関係した遺物、実測図、写真・マイクロフィルム等は岡山県古代吉備文化財センターにおいて保管している。

目　　次

例　言
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査の経緯 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 6
第４章　まとめ …… 26

図　目　次

第１図　遺跡位置図(黒丸印)(1/2,000,000) …1
第２図　周辺遺跡分布図(1/30,000) ……2
第３図　各年度の確認調査対象範囲(1/25,000) 3
第４図　遺跡周辺地形図および確認調査対象範囲(アミ目部)(1/15,000) …… 7
第５図　トレンチ位置図(1/5,000) …… 8
第６図　西区平面・断面図Ⅰ(T1～7)(1/80) …… 9
第７図　西区出土遺物(T1～12)(1/4,1/2) ……10
第８図　西区平面・断面図Ⅱ(T8～12)(1/80) …11
第９図　東区平面・断面図Ⅰ(T13～15)(1/80) …13
第10図　東区出土遺物Ⅰ(T13～15)(1/4) ……14
第11図　東区平面・断面図Ⅱ(T16～18)(1/80) …15
第12図　東区出土遺物Ⅱ(T16～17)(1/4,1/2) …16
第13図　東区平面・断面図Ⅲ(T19～22)(1/80) …17
第14図　東区出土遺物Ⅲ(T19～22)(1/4,1/2) …18
第15図　東区平面・断面図Ⅳ(T23～25)(1/80) …19
第16図　東区出土遺物Ⅳ(T23～25)(1/4,1/2) …20
第17図　東区平面・断面図Ⅴ(T26～29)(1/80) …21
第18図　東区出土遺物Ⅴ(T26～40)(1/4) ……22
第19図　東区平面・断面図Ⅵ(T30～34)(1/80) …23
第20図　東区平面・断面図Ⅶ(T35～40)(1/80) …24
第21図　東区出土遺物Ⅵ(T27～37)(1/2) ……25
第22図　遺跡範囲想定図(≡部分,アミ目は調査範囲) 26
(1/10,000)

図版目次

図版１(上)調査地遠景
(下)西区(T２・３・11・12)
図版２　東区(T13～19)
図版３　東区(T20～24・26～28)
図版４　東区(T30～32・34～36・39・40)
図版５　出土遺物Ⅰ
図版６　出土遺物Ⅱ

第１章　地理的・歴史的環境

今回調査した一帯は、高梁川旧河道の堆積作用によって作り出された広大な総社平野の南東部に位置する。平野の南端を流れる前川が東方の足守川と合流する付近にあたり、いくつかの微高地が点在する。そのすぐ南には標高50～60ｍの三須丘陵が広がり、北は吉備高原南縁の山塊が控えている。

周知のように、この地域は県下屈指の遺跡密集地帯である。南接する三須丘陵にはおよそ350基の古墳が確認されており、そのうちには全長約142ｍの小造山古墳や、緑山古墳群[1]、亀山古墳などの巨石墳もみられる。また、丘陵周辺には造山古墳、作山古墳をはじめ、備中こうもり塚古墳[2]や江崎古墳[3]などがある。こうした他地域を圧倒する古墳の様相は、周辺の平野部でのいくつかの大規模集落の存在を十分想定させるものである。

今回の調査地に北接する窪木薬師遺跡[4]は、古墳時代後期を中心とする集落跡であるが、製鉄関係の遺構・遺物が多数発見され注目を浴びた。また北側の県立大学建設予定地では、弥生時代を中心に縄文時代後期から中世にわたる複合遺跡の実態が明らかとなった（窪木遺跡・南溝手遺跡[5]）。さらにその北方の山塊には古代山城の鬼ノ城[6]が存在し、東山麓では土塁、砦状遺構の残る千引遺跡群[7]、６世紀後半の製鉄遺跡である千引かなくろ谷製鉄遺跡[8]が調査された。その他、古代の遺跡として調査地の北西には栢寺廃寺[9]が位置し、備中国府推定地、国分寺も近い。　このように、調査地一帯は、古代を中心に歴史上重要かつ有力な集団が存続した地域であるが、近年の大規模な調査によりその実態が次第に明らかとなってきた。

註

1) 『緑山古墳群』緑山古墳群調査団 1987年
2) 「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35 岡山県教育委員会 1979年
3) 近藤義郎「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 1987年
4) 『岡山県埋蔵文化財報告』21・22 岡山県教育委員会 1991・1992年
5) 前掲書 4)
6) 『鬼ノ城』鬼ノ城学術調査委員会 1980年
7) 『総社市埋蔵文化財発掘調査年報』1 総社市教育委員会 1991年
8) 前掲書 7)
9) 「栢寺廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会 1979年

第１図　遺跡位置図（黒丸印）（1/2,000,000）

1．下林散布地(調査地)
2．窪木薬師遺跡
3．赤浜城山城跡
4．庚申山古墳群(総社市)
5．庚申山遺跡
6．庚申山東遺跡
7．庚申山古墳群(岡山市)
8．雲上山１～40号墳
9．小造山古墳
10．夫婦塚(のみや)古墳
11．銭瓶塚古墳
12．新池大塚古墳
13．下林古墳群
14．法運古墳群
15．亀山古墳
16．松井古墳群
17．ドンドン山古墳群
18．稲荷山古墳群
19．緑山古墳群
20．賀夜廃寺(栢寺廃寺)
21．深町遺跡
22．窪木遺跡・南溝手遺跡
23．本台山遺跡
24．本台山古墳群
25．長良山遺跡
26．長良山古墳群
27．久米古墳群
28．延寿寺跡
29．散布地
30．上土田古墳群
31．大崎古墳群
32．浦尾古墳群
33．大崎西古墳群
34．散布地
35．散布地
36．散布地
37．散布地
38．生石神社裏山古墳群
39．向井古墳群
40．大崎廃寺
41．高塚遺跡
42．三手遺跡
43．津寺遺跡
44．甫崎天神遺跡
45．甫崎古墳群
46．津寺Ｃ遺跡
47．黒住山古墳群
48．向場古墳群
49．造山古墳
50．榊山古墳
51．車塚古墳
Ａ～Ｆ　散布地

第２図　周辺遺跡分布図（1/30,000）

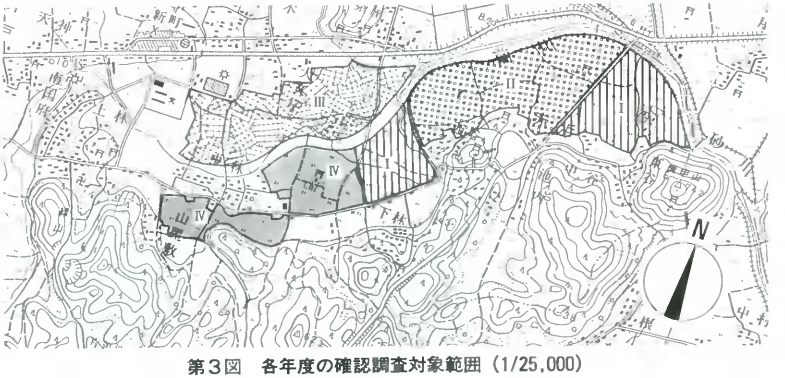
第２章　調査の経緯

総社市赤浜、下林、窪木一帯においては県営土地改良総合整備事業が計画されているが、当地については、総社市教育委員会から昭和63年９月30日付けで、文化財保護法第57条の６第１項の規定による遺跡発見届が上げられ、それに伴い遺跡の範囲確定および遺跡保存の協議資料を得るため、工事着工前に国庫補助を受けて数年次にわたる確認調査を実施することとなった。

発掘調査は、岡山県古代吉備文化財センターが、専門委員の指導・助言を得て平成元年度から実施している。平成元年度調査は、平成元年11月６日から平成２年１月23日まで実施され、赤浜地区の東側３分の１と下林地区の東側半分の地域について遺跡の範囲等が明らかになった。引き続いて平成２年度の調査は、赤浜地区の西側３分の２の地域について平成２年４月９日から平成２年５月23日まで行なわれ、広範囲な遺跡の所在が確認された。平成３年度は、下林地区の北側、窪木地区を対象に平成３年４月10日から平成３年５月30日まで調査を実施し、東西に長く延びる微高地上に大規模な集落跡を確認した。

今回は本確認調査の最終年度にあたり、前年度調査区の南側、下林・上林地区について平成４年４月13日から平成４年５月22日まで実施した。調査は、東側の微高地部分から始め順次西方へ向かって進めたが、その結果、前年同様広範な遺跡を確認した。

調査にあたっては、総社市、総社市教育委員会、地権者等関係者より多大なご協力を得た。また、発掘作業にあたっては、地元有志の方々にご協力を得た。諸氏、諸機関に対し深く謝意を表する次第である。



第３図　各年度の確認調査対象範囲（1/25,000）

調査体制

岡山県古代吉備文化財センター

所　長	横山　常實
次　長	河本　　清
文化財保護参事	葛原　克人
総務課長	北原　　求
文化財保護主査	桑田　俊明（調査担当）

発掘作業員

鷺原秀一・新谷和男・槇枝　茂・守谷幹夫・渡辺保男・角田幸子・角田スエコ
中川照子・信元夏子・前田信子

日誌抄

4月13日(月)	器材・資材の搬入，T17・18掘り下げ，テントの設置
4月14日(火)	T17～20掘り下げ，T17～19写真撮影，レベル基準杭の設定（東区），トレンチ設定（東区）
4月15日(水)	トレンチ設定（東・西区），T17断面実測
4月16日(木)	T20・21・23・29掘り下げ，T20・21・23写真撮影，T17平面・断面実測，T19断面実測
4月17日(金)	T26～30掘り下げ，T26～28写真撮影，T18・21断面実測，トレンチ設定(西区)，レベル基準杭の設定（西区）
4月18日(土)	T25・27・30掘り下げ，T27・30写真撮影，T29断面実測
4月20日(月)	T14・15・22・32掘り下げ，T14・15・32写真撮影，T27平面・断面実測
4月21日(火)	T13・22・39掘り下げ，T13・21・25・39写真撮影，T28平面・断面実測，T23断面実測
4月22日(水)	トレンチの安全確認
4月23日(木)	T12・16・31・40掘り下げ，T16・22・31・40写真撮影，T22・23断面実測
4月24日(金)	T９～12掘り下げ，T９～12写真撮影，T25平面・断面実測，T22・23断面実測
4月27日(月)	T１・５～８掘り下げ，T１・５～８写真撮影，T30平面・断面実測，T32断面実測
4月28日(火)	T２～４・24掘り下げ，T２～４写真撮影，T31平面・断面実測
4月30日(木)	トレンチ安全点検
5月１日(金)	T24・35・37掘り下げ，T24・35・37写真撮影，T13平面・断面実測，トレンチ位置略測
5月２日(土)	トレンチ位置略測
5月６日(水)	T33・34・36・38掘り下げ，T33・34・36・38写真撮影，T15平面・断面実測，T14・38断面実測
5月７日(木)	T９・10・12・18・19・40埋め戻し，T12平面・断面実測 T９・10・33・40断面実測
5月８日(金)	T６・13埋め戻し，T11～17・22～24清掃，T７・８断面実測
5月11日(月)	T５・６・38・39埋め戻し，T５・６・39断面実測，専門委員の現地視察
5月12日(火)	T16掘り下げ，T25・34～37埋め戻し，T26・34～37断面実測

第３章　発掘調査の概要

今回の発掘調査は、昨年度調査した窪木散布地の南方、前川と三須丘陵に挟まれた下林散布地一帯を対象範囲に実施した。この散布地の東側の一部はすでに1989年度に第１次確認調査が行なわれている。調査地は、前川に沿って東西に長く延びる微高地と、その南側の低位部からなり、沖積地にしては比較的起伏の明瞭な地形を残している。調査の便宜上、東半の微高地部分を東区、西半の低位部一帯を西区とし、２×５ｍのトレンチを計40本掘開した。各区の調査結果は以下のとおりである。

(1)西区（Ｔ１～12）

西区は、大半が低位部であるが、東西両端に低位な舌状台地がある。計12本のトレンチを設定した。

①Ｔ１～７（第６・７図）

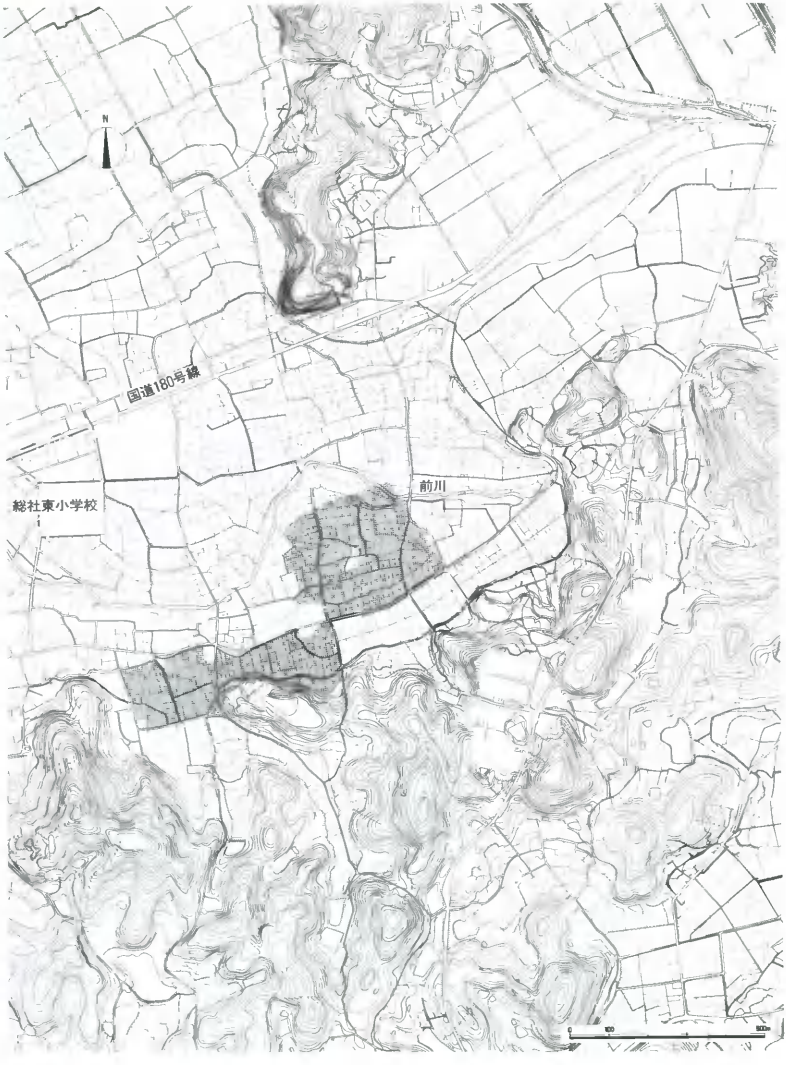
Ｔ１では、耕作土下約25cmで中世水田層（第４・５層）が確認できたが、それ以下は砂質土である。遺物は認められなかった。

Ｔ２は、西端の低位台地上に設けたトレンチで、比較的浅い層より遺構が検出された。耕作土直下に黒褐色に近い暗茶褐色の包含層が10cmほど堆積し、その下層に暗黄褐色のしっかりした基盤層がみられた。遺構は基盤層で確認したが、断面によると包含層より切り込んでいる。土壙１、ピット９を検出したが、Ｐ１～３は柱痕を残しており２間×１間以上の掘立柱建物と思われる。Ｐ４からは後期前半の弥生土器(1)が出土している。遺構は土色等より最低３時期に分かれ、掘立柱建物や土壙はＰ４より古い。また包含層中より土師器の甕(2)も出土している。周辺の地形をみると、西方の丘陵が東へ舌状に張り出し、Ｔ２付近で台地の先端部となっている。したがって遺跡の範囲も西方へ広がるものと想定される。なお、トレンチ周辺は後世の地下げにより包含層が削平されている。

Ｔ３～６は、Ｔ１同様に低位部に位置するトレンチである。いずれもほぼ共通した層序を示し、Ｔ６以外では中世水田層が検出できたが、それ以下は粘土層が堆積しており湧水が著しい。ピット等は皆無で、旧河道の湿潤な状況が観察できる。遺物は、Ｔ３より早島式土器(4)や近世陶器の椀(3)等が若干出土した程度である。

Ｔ７は、層序は先のＴ３～６とほぼ同様であるが、各層より古墳時代と中世の土器他が少し出土している。６世紀後半の須恵器杯(7)・高杯(6)、土師質土器の土鍋支脚(5)、長方形板状の鉄器片(12)等である。いずれも北側の微高地からの流入品であり、近接して遺跡の存在する可能性がある。

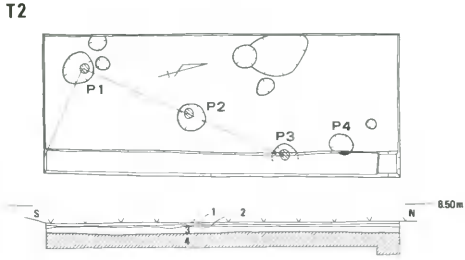
5月13日(水)	T26・29埋め戻し，T26平面実測，文化庁井上調査官の現地視察
5月14日(木)	T1・3・29～32埋め戻し，T1・3・4・24断面実測，T2・24平面実測
5月15日(金)	T2遺構の掘り下げ，T2・4埋め戻し，T2断面実測
5月16日(土)	T11埋め戻し，T11平面・断面実測，トレンチ排水作業
5月18日(月)	トレンチ安全点検
5月19日(火)	T20・22～24遺構一部掘り下げ，T17・20・22～24埋め戻し，T20写真撮影・平面・断面実測
5月20日(水)	T14・16遺構一部掘り下げ，T13～15埋め戻し，T14・16写真撮影，T16平面実測
5月21日(木)	T16遺構一部掘り下げ，T16・21埋め戻し，T16断面実測トレンチの埋め戻し点検と位置確認，器材の整備・かたづけ
5月22日(金)	テントの撤収，器材の搬出，確認調査の終了



第４図　遺跡周辺地形図および確認調査対象範囲（アミ目部分）（1/15,000）

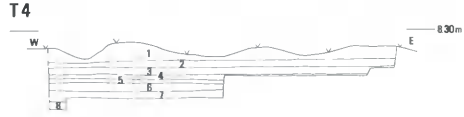
第５図　トレンチ位置図（1/5,000）

T－1
1．耕土
2．〃
3．灰褐色土
4．灰色粘質土（中世水田層）
5．灰色粘土（　〃　）
6．暗灰褐色砂質土
7．灰褐色砂質土

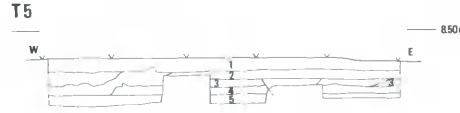


T－2
1．耕土
2．灰色砂質土（床土）
3．暗茶褐色土（包含層）
4．暗黄褐色土（基盤層）

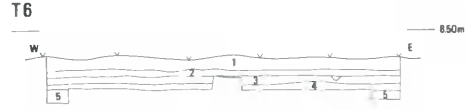
T－3
1．耕土
2．〃
3．淡灰褐色土
4．〃
5．灰色粘土（中世水田層）
6．灰色粘土
7．暗灰褐色砂質土（マンガン層）
8．暗灰褐色砂質土（　〃　）



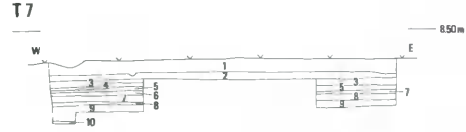
T－4
1．耕土
2．〃
3．淡灰褐色土
4．灰褐色土（中世水田層）
5．灰色粘土
6．〃
7．暗灰色粘土
8．黄灰色粘土



T－5
1．耕土
2．〃
3．淡灰褐色土
4．灰色粘土（中世水田層）
5．灰色粘土



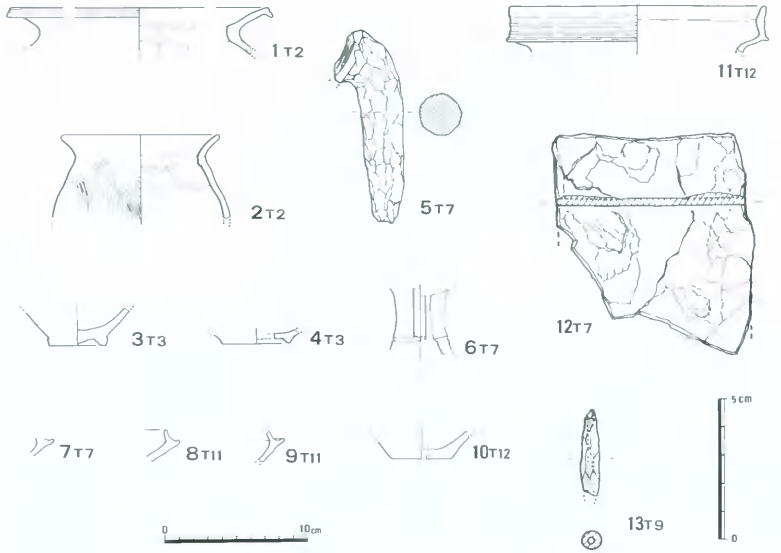
T－6
1．耕土
2．〃
3．淡灰褐色土
4．灰色粘質土
5．灰色粘土



T－7
1．耕土
2．〃
3．灰褐色土
4．〃
5．〃
6．灰色粘質土
7．灰色粘土
8．〃
9．〃
10．黄灰色土

0　2m

第６図　西区平面・断面図Ⅰ（Ｔ１～７）(1/80)



第７図　西区出土遺物（Ｔ１～12）（1/4.12・13は1/2）

②Ｔ８～12（第７・８図）

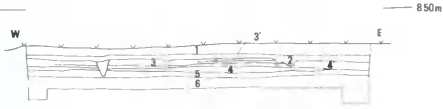
Ｔ８は、Ｔ３～６同様の土層で下部に粘土層が堆積する。遺物はみられない。

Ｔ９もほぼ同じであるが、下層より土錘(13)が出土している。下層の堆積土はＴ８に比し微高地寄りの状況も若干みうけられる。

T10は、Ｔ11・12より一段低い低位部に位置する。耕作土下に中世および中・近世以降の水田層が２～３層あり、それ以下は粘質の強い灰色粘土層が厚く堆積する。出土遺物はない。

T11・12は、西区東端の低位台地上にある。南側丘陵から派生した尾根の最末端部にあたり、南を除く三方は低位部との間に明瞭な段差をなす。Ｔ11では北半で竪穴住居の南壁を検出した。方形プランを呈し、壁体溝をもつ。遺存は比較的良好で壁高約30cmを残す。ほかには、ピット７、溝状遺構１を検出したが、後者は竪穴住居を切っている。埋土の状況より３～４時期に分けられよう。遺構は基盤層で検出したが、ほとんどが第７層の包含層より切り込んだものである。遺物はわずかであるが、須恵器杯(8・9)の小片が第３層より出土している。一方Ｔ12では、小ピット６～７を検出した。遺構密度はそれほど濃いとは言い難いが、表土下約30～40cmで基盤に達し、西に向かって緩やかに下降している。出土遺物には、後期の弥生土器(11)ほか若干ある。

T8



T－8
1．耕土
2．〃
3．淡灰色土
4．灰色土
5．灰色粘土
6．〃

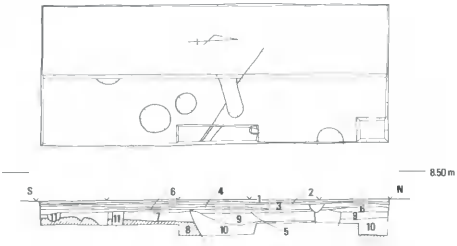
T9

T－9
1．耕土
2．灰色土（床土）
3．淡灰褐色土（マンガン層）
4．灰色粘土
5．暗灰色粘土
6．灰褐色粘土
7．暗灰色粘土
8．黒灰色粘土

T10

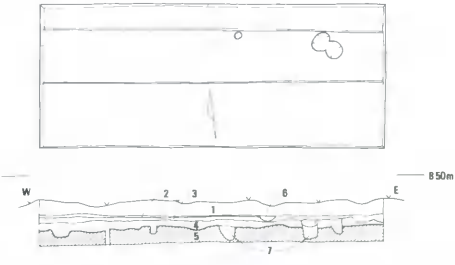
T－10
1．耕土
2．灰色土（床土）
3．〃
4．〃
4'．淡灰褐色土
5．灰色粘質土
6．灰色粘土
7．〃
8．〃

T11



T－11
1．耕土
2．灰色土（床土）
3．灰色砂質土
4．〃
5．灰色土
6．灰色土（マンガン層）
7．暗灰褐色土
8．暗黄褐色土（基盤層）
9．暗灰褐色土
10．暗灰褐色土
11．暗灰褐色土

T12



T－12
1．耕土
2．灰色土（床土）
3．灰褐色米（〃）
4．暗灰褐色土（包含層）
5．暗黄褐色土（基盤層）
6．灰白色土
7．淡黒褐色土

第８図　西区平面・断面図II（T８～12）（1/80）

(2)東区（T13～40）

東区では、微高地部分に19本、周辺の低位部分に9本のトレンチを設定した。

①T13～18（第９～12図）

T13では、耕作土下に暗茶褐色～暗灰褐色の砂質土が堆積し（第４～６層－包含層）、ピット11を確認した。また、トレンチの東半では４～６層に円礫が多数みられ、北から南に緩やかに下降していた。円礫層は西に向かって疎らとなる。３層から須恵器・杯蓋(14)が出土した。

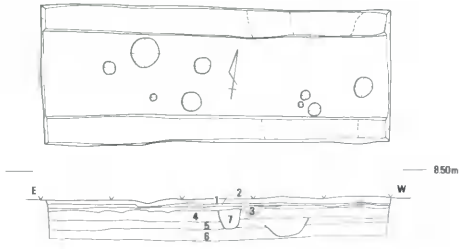
T14では、柱穴４、溝１を検出した。柱穴はいずれも柱痕を残す。Ｐ１～３は同時期で、掘立柱建物になると思われる。またトレンチの北端で東西方向の溝を検出した。幅1.3ｍ前後で、焼土塊・炭を含む。遺物は、Ｐ１の埋土上層より破片ながら10数個体分の弥生土器が出土した。甕は、口縁部を上方へ拡張させるもの(15～19)と拡張せず端部を丸くおさめるもの(25)がある。15は退化した凹線文をとどめる。底部は丸底化が進んでいるがいずれも平底である。高杯(28～32)は短脚である。26は完形の椀で、底部を平底風に仕上げている。内面は下半がヘラ削り、上半は細かな刷毛目調整で、口縁部を指で押さえて仕上げる。

T15は、プランでの遺構検出はむずかしかったが、東壁断面に竪穴住居と思われる落ち込みを確認した。包含層（４・５層）を掘込んでおり、遺構内には円礫が多数流入し完形の弥生土器・椀(36)も出土した。この土器はわずかに平底をとどめ、外面を粗い縦ヘラ削り、内面をヘラ磨きする。他には、３・４層より同時期の高杯(39・40)や中期末の甕(35)、須恵器の杯身・蓋(41・42)、瓶(43)などがある。

T16は微高地のほぼ中央に位置するトレンチである。全面円礫が多く遺構の検出がかなり困難であったが、東西断面で落ち込みが確認でき、遺構上面に土器もまとまって分布することから、竪穴住居と判断した。トレンチの北半を占め、南壁は緩やかな弧状を呈すが平面形は不明である。その他にピットや土壙も検出できた。出土遺物には各種の弥生土器がある。44は口縁部を上方に拡張しごく退化した凹線文を施す壺である。胴部はやや肩が張り、内面横方向のヘラ削り、外面はややラフなヘラ磨きである。45は壺の底部であるが、しっかりした平底である。46～48は上方へ立ち上がる口縁部に凹線文(46・48)や櫛描文(47)を施す。49は小さく外反する口縁部をもつ鉢で、胴部内面は下半が削り、上半は板状具による横なでである。外面は粗い削りが上半まで及ぶ。50・54の内面は横方向の細かいヘラ磨きである。

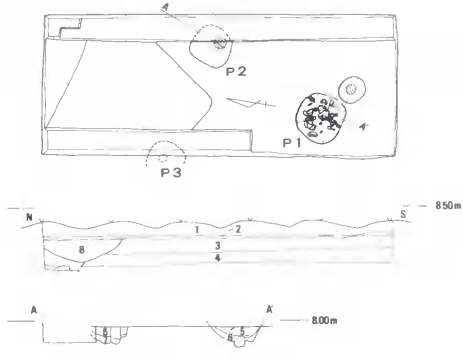
T17では、耕作土下の比較的浅い層で遺構を確認できた。まず、５層（包含層）を切り込んで東西方向の溝を３条検出した。深さ約10cm、幅は30～45cmのものと60cm以上のものがある。４層土はこの溝の流入土である。この下層から竪穴住居が検出された。南壁の一部とカマドを確認した。南壁はほぼ直線で、壁付近に焼土塊や炭の層がみられる。カマドはトレンチ北東隅で

T13



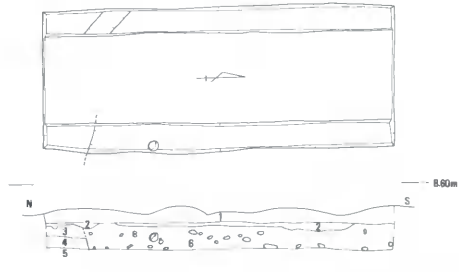
T−13 1．耕土
2．〃
3．灰色砂質土（床土）
4．暗茶褐色砂質土
5．〃
6．暗灰褐色粗砂
7．暗灰褐色微砂

T14



T−14 1．耕土
2．灰色土（床土）
3．暗茶褐色砂質土
4．〃
5．暗茶褐色砂質土
6．暗灰褐色砂質土
7．〃
8．〃

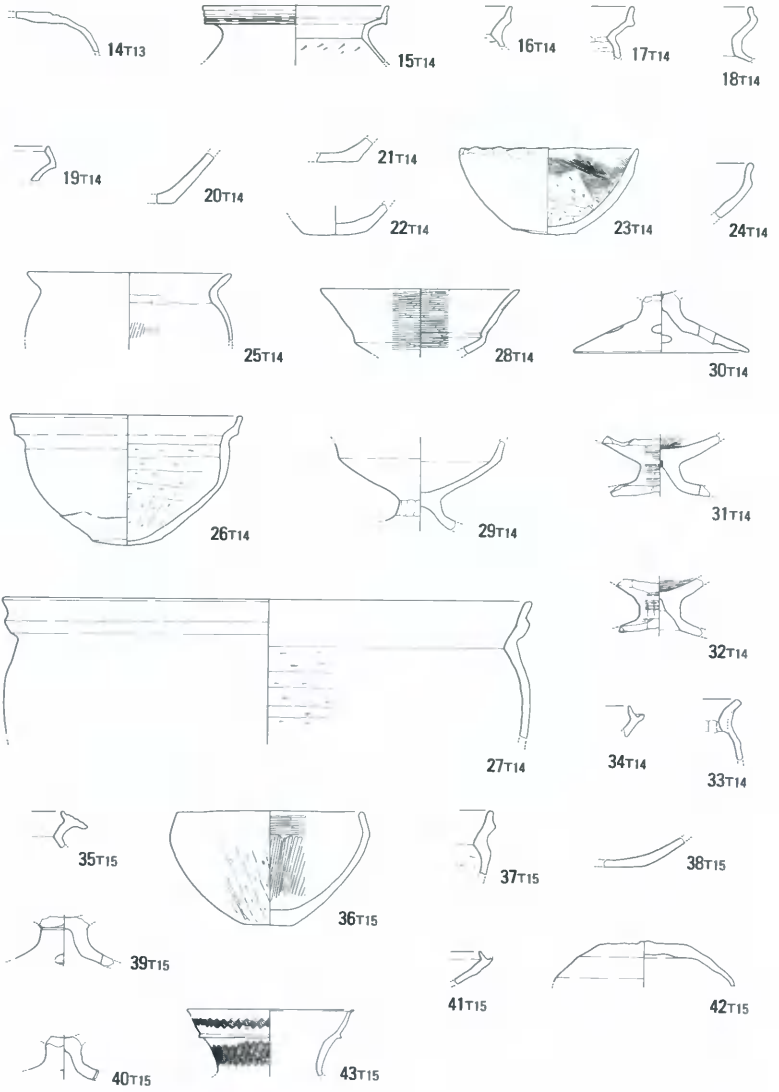
T15



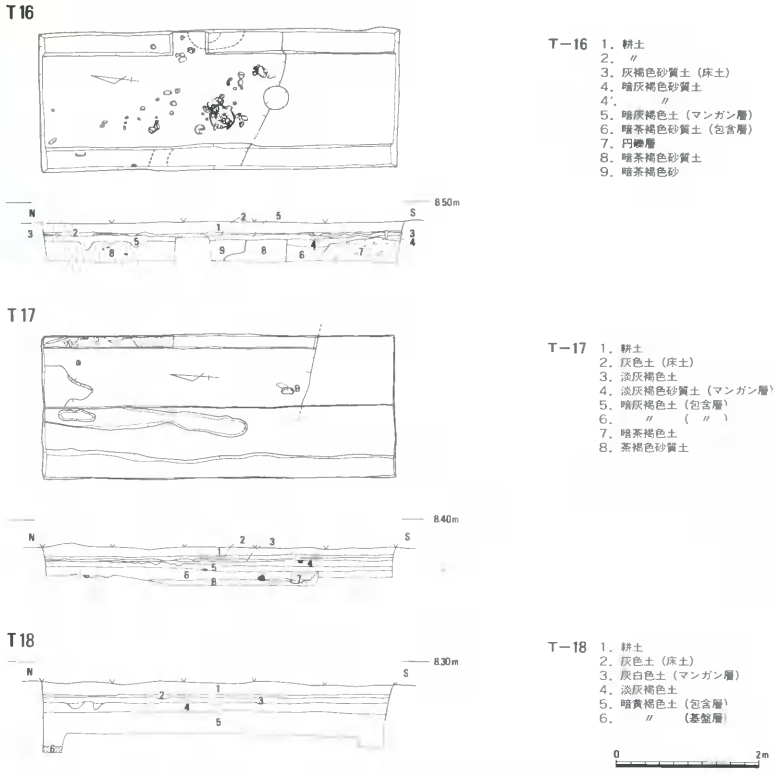
T−15 1．耕土
2．灰色土（床土）
3．暗灰褐色土（包含層）
4．〃 （〃）
5．暗黄褐色粘質土
6．暗茶褐色土

0 2m

第９図　東区平面・断面図Ⅰ（T13〜15）（1/80）



第10図　東区出土遺物Ⅰ（T13～15）（1/4）



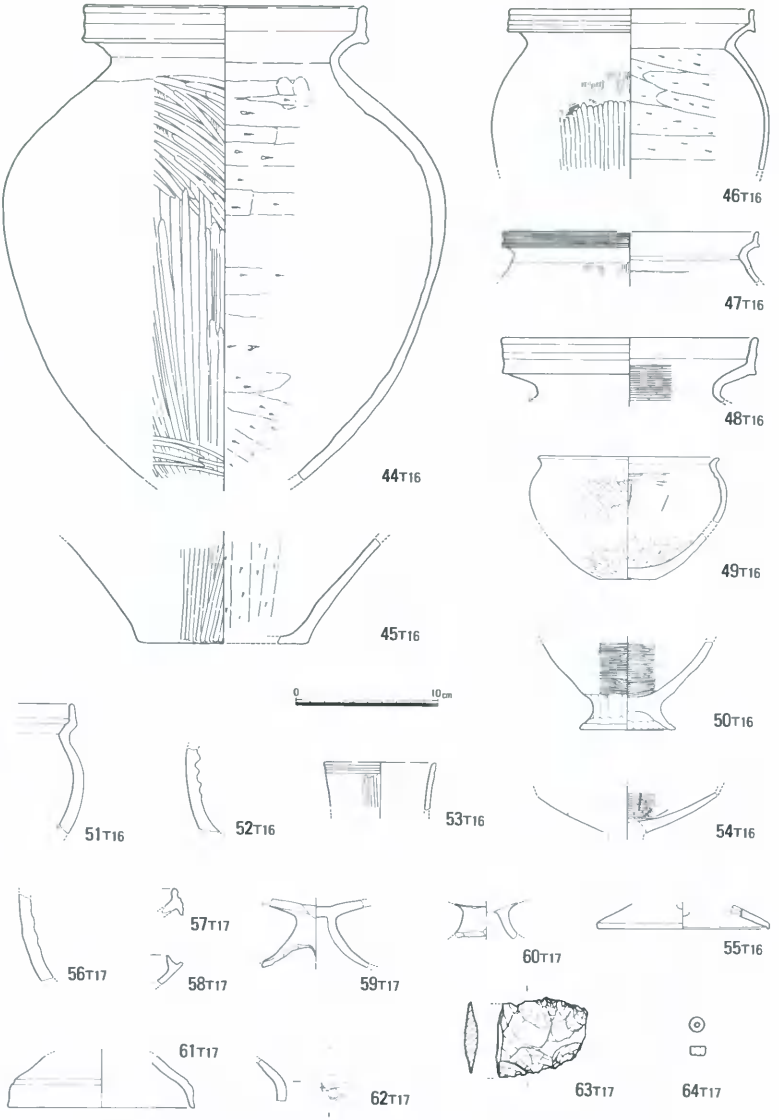
第11図　東区平面・断面図Ⅱ（T16〜18）（1/80）

検出され東断面付近で焼土面が広がっていた。煙道は北側へ付くようである。遺物では須恵器の杯蓋(61)と高杯(60)が出土している。これらの点から、この住居跡は6世紀後半のカマド付きの方形竪穴住居と考えられる。なお、遺物にはわずかながら中期末の弥生土器（56・57）や石器(63)、小玉(64)が3層より出土している。

T18は微高地の南端部に設けたトレンチである。包含層（4・5層）が厚く堆積し、表土下約90cmで基盤らしい暗黄褐色土が確認できたが、包含層中からは遺構は認められなかった。下部では湧水を伴うため基盤層での遺構検出は断念した。

②T19〜24（第13〜16図）

T19では表土下35〜55cmで礫層（5層）にあたり、それ以下では粗砂層となる。礫層は東へ

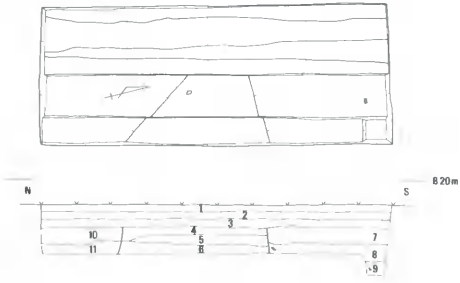


第12図　東区出土遺物II（T16～17）（1/4，63・64は1/2）

T19

T−19
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 灰白色砂質土（ 〃 ）
4. 淡茶褐色砂質土
5. 礫層
6. 粗砂

T20

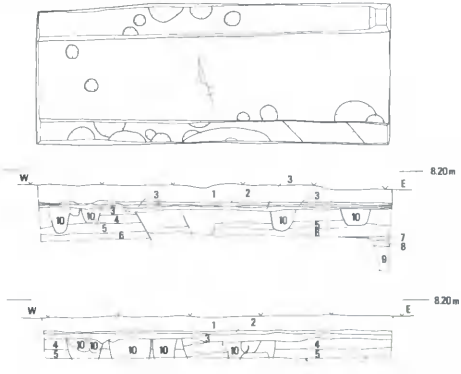


T−20
1. 耕土
2. 灰黄色土
3. 淡灰褐色砂質土（マンガン層）
4. 暗灰褐色土
5. 〃 （包含層）
6. 〃 （ 〃 ）
7. 暗茶褐色土
8. 〃
9. 暗黄褐色土
10. 暗茶褐色土
11. 〃

T21

T−21
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 淡灰褐色土
4. 〃
5. 〃 （マンガン層）
6. 暗灰褐色土（包含層）
7. 〃 （ 〃 ）
8. 〃

T22



T−22
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 淡灰褐色砂質土（マンガン層）
3′. 〃
4. 暗灰褐色砂質土
5. 〃
6. 灰褐色砂
7. 灰茶色砂
8. 〃
9. 灰色粗砂
10. 暗灰褐色土

0 2m

第13図　東区平面・断面図Ⅲ（T19〜22）（1/80）

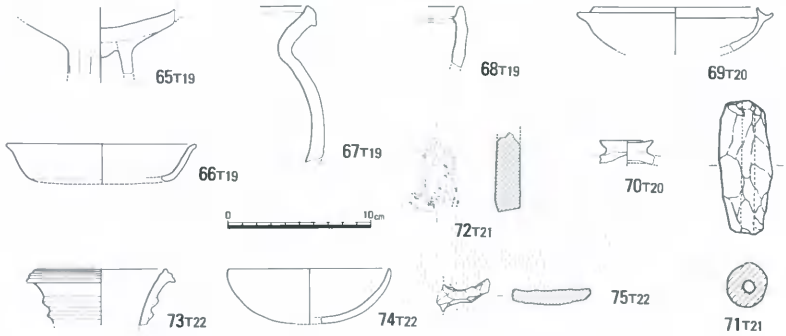
向かって緩やかに下降する。遺構はみられないが、土師器の高杯(65)や丹塗りの杯(66)、須恵器の甕ほかが3層より出土している。

T20は、土色の変化が微妙で遺構検出がかなり困難であったが、トレンチの南北でそれぞれ落ち込みを確認できた。両方とも方形の竪穴住居と思われ、流入土中には須恵器や焼土塊、炭を含む。遺構の遺存は良好である。北側の竪穴住居からは須恵器の杯(69)が出土しており、これらの遺構は6世紀後半～7世紀初頭のものと考えられる。また、2層中位より浅い溝が2条検出されたが、時期は近世あるいはそれ以降のものである。

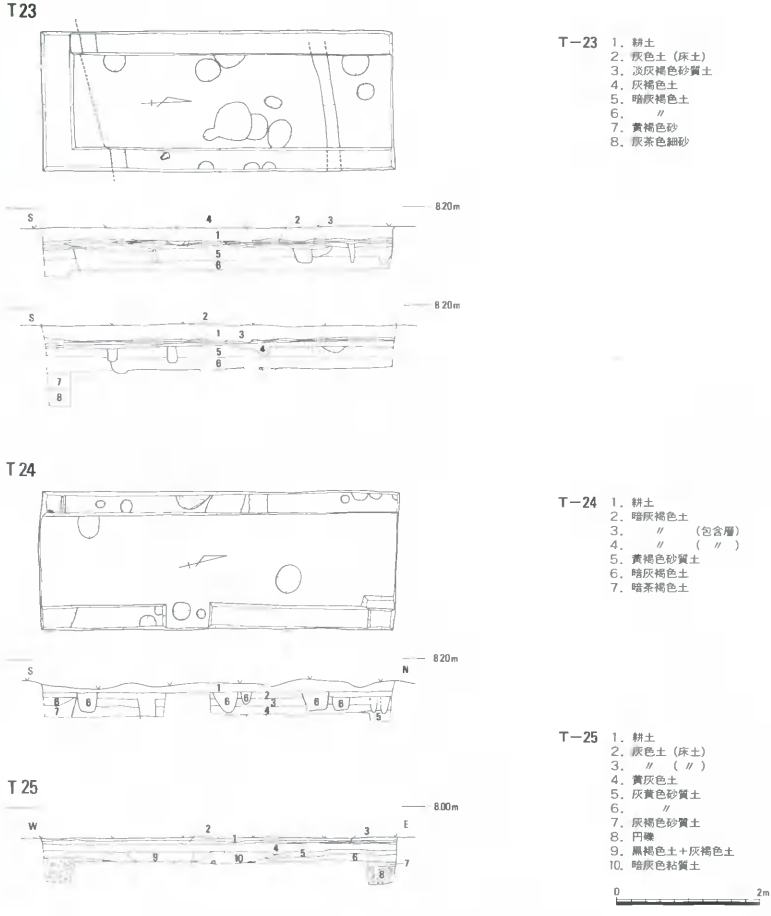
T21では、包含層（6・7層）はみられたが遺構は確認できなかった。遺物は、3層より平瓦片(72)と土錘(71)が出ている。

T22は、東区微高地の東半中央に設置したトレンチである。4層以下の包含層を切り込んで多数のピット、土壙1～2、溝1が検出された。土色変化が微妙なため、遺構のほとんどは南北両サイドを掘り下げて断面・平面で確認した。ピットは大小21～24あり暗灰褐色を基調にする。土壙は南側断面中央で検出され、径1.3m以上であるが詳細不明である。溝はその東で検出できたが、北側断面に続かず土壙の可能性もある。幅約60cmで焼土、土器片を含む。73は中期後葉の弥生土器・壺で、口縁部には太い凹線文2条、頸部には断面三角形の貼り付け突帯文が付く。75は甑の把手である。

T23では、方形の竪穴住居が認められ、南壁の一部が検出された。幅広で浅い壁体溝をもつ。床面付近で須恵器の高杯脚部(91)が出土している。1対の長脚2段透しを有す。その他に出土遺物は多種におよぶ。弥生土器では矢羽根形の透しをもつ高杯脚部(78)が出土している。須恵器では、完形の短頸壺(83)や杯蓋(85～87)、甕(88・89)、高杯脚部(92・93)などがある。84は左右もしくは上下両方に把手をもち、提瓶の胴部と思われるが、平瓶あるいは特殊な器形の土



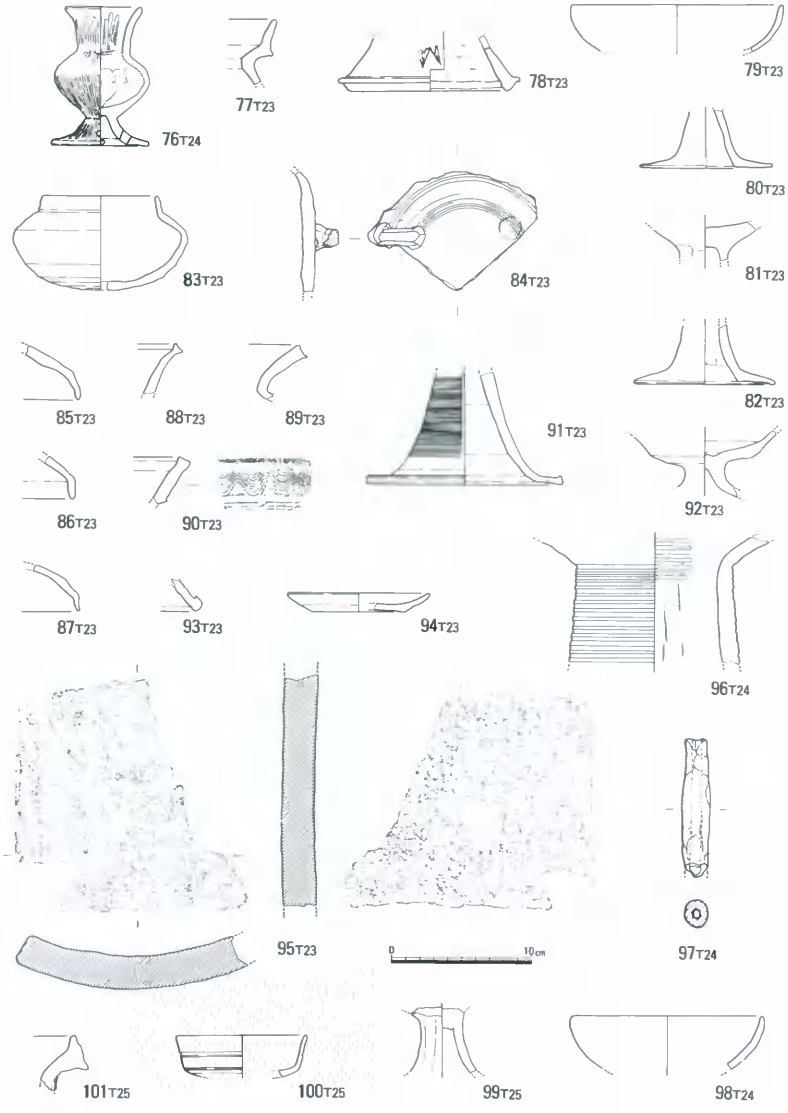
第14図　東区出土遺物Ⅲ（T19～22）（1/4,71は1/2）



第15図　東区平面・断面図Ⅳ（T23〜25）（1/80）

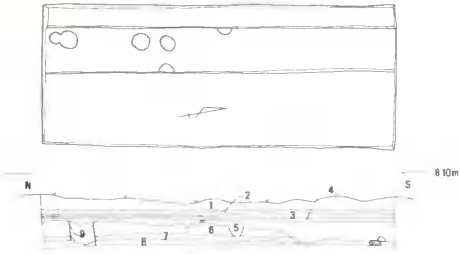
器になるかもしれない。また、3層出土の平瓦片(95)は、外面を叩きの後ナデて仕上げ、内面には布目痕をよく残す。

T24は、微高地の東端に設けたトレンチで、ピット21、溝1他を確認した。ピットは少なくとも3時期以上はありそうである。南端では、竪穴住居状の落ち込みがみられ、焼土・炭を多く含んでいた。遺物は多くはないが、土錘(97)や土師器の椀(98)などが出土している。



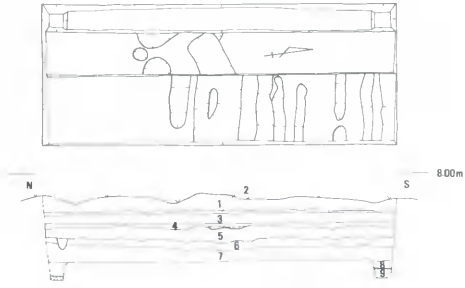
第16図　東区出土遺物Ⅳ（T23～25）（1/4,97は1/2）

T26



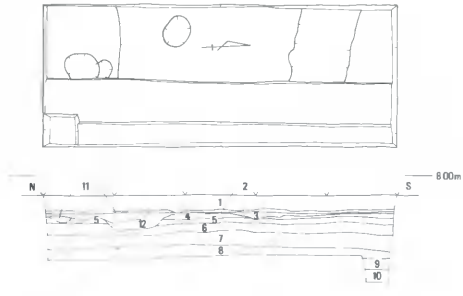
T−26
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 〃
4. 淡灰褐色土
5. 淡灰褐色砂質土
6. 黄灰色砂質土
7. 淡灰茶色土
8. 〃
9. 灰褐色砂質土

T 27



T−27
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 灰白色土
4. 灰色土
5. 暗灰褐色土
6. 灰褐色土
7. 暗灰褐色土
8. 灰茶色土
9. 灰色粘質土

T 28



T−28
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 〃
4. 明灰色土
5. 灰褐色土
6. 灰褐色土
7. 〃
8. 暗灰褐色砂質土
9. 灰黄色砂質土
10. 黄灰色粘土
11. 灰白色土
12. 灰色土

T 29

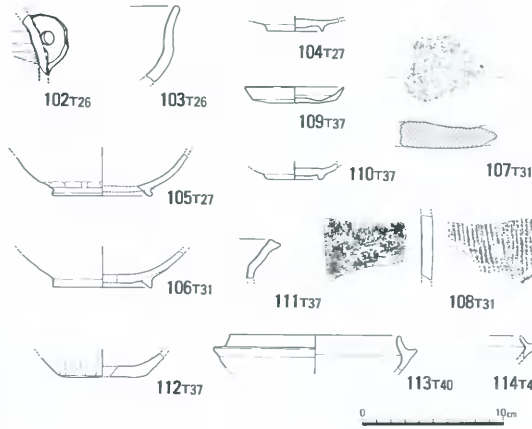
T−29
1. 耕土
2. 暗灰褐色砂質土
3. 円礫
3'. 〃

第17図　東区平面・断面図Ⅴ（T26〜29）（1/80）

③T25～35（第15～21図）

T25は、微高地の縁辺にあたる。表土下30～40cmで全面円礫層に達し、緩やかに東へ下降する。遺構はみられず、弥生土器(101)、須恵器(100)など若干出土している。

T26では中世以降の堆積層は認められたが、微高地の下がりは確認できなかった。遺構は、中世以降のピットを確認した程度である。遺物では羽釜の釣り手(102)、施釉陶器(103)が出ている。



第18図　東区出土遺物Ⅴ（T26～40）（1/4）

T27では、微高地の他のトレンチとはやや色調を異にするが、7・8層が包含層、9層が基盤層の可能性が高い。遺構は上層の5・6層から小溝8条、ピット等が検出されたが、いずれも中・近世以降のものである。早島式土器の椀(105)や煙管(115)が出土している。

T28は、最下層に青灰色粘質土がみられ、旧河道の状況を呈していた。検出した溝等は近・現代のものである。

T29は微高地中央に位置し遺構の所在が予想されたが、耕作土直下で円礫層が厚く堆積していた。この円礫層は南側のT19に続くもので現在の神社部分も含めて微高地の核を形成する。

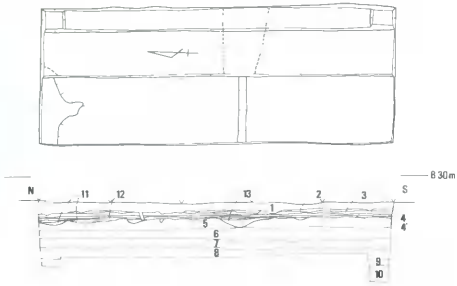
T30は、T28とほぼ同様な土層状況を示していた。

T31では、5層が焼土小塊を含み包含層と思われる。微高地の北縁部が当トレンチまでは延びるものと考えられるが、古い時期の遺構は認められず、中・近世遺構の溝・ピットがいくつか検出できた程度である。早島式土器の椀(106)や平瓦片(107)、古式須恵器の甕(108)が出土した。108は外面細目の格子目叩き、内面は同心円叩き目をなでて消している。

T32～34は、調査区の北端、前川沿いに設けたトレンチである。当初の予想どおりこの部分は砂層・粘土層が堆積し、旧河道の様相を呈していた。遺構は、T33で不明瞭なピット、溝が上層より検出されたが、それ以外は確認されなかった。遺物もまた極端に少ない。

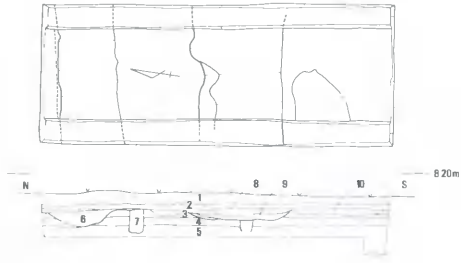
T35は、トレンチ中央に最近の暗渠があたりまた湧水もあり、部分的な土層の確認にとどめた。6層以上は近世以降の堆積土で、旧河道部分に相当すると考えられる。遺構はないが、上

T30



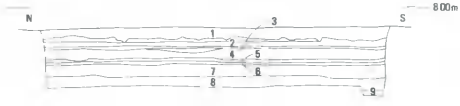
T−30
1．耕土
2．灰色土（床土）
3．黄灰色土
4．　〃
4'．　〃
5．淡茶灰色砂質土
6．淡茶灰色砂
7．暗灰褐色砂
8．暗灰褐色砂
9．暗茶灰色砂
10．茶灰色砂
11．灰褐色土
12．黄灰色土
13．淡灰褐色土

T31



T−31
1．耕土
2．灰黄色土
3．暗灰褐色土
4．　〃
5．　〃
6．灰色土
7．暗灰褐色土
8．　〃
9．灰色土
10．　〃

T32

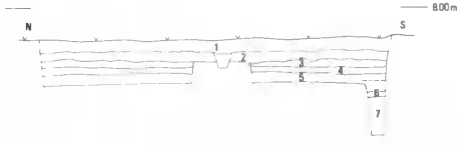


T−32
1．耕土
2．灰黄色土
3．灰色土
4．灰色砂質土
5．灰色粘質土
6．灰色砂質土
7．淡灰褐色土
8．黄灰色砂質土
9．淡青灰色微砂

T33

T−33
1．耕土
2．灰色土
3．　〃
4．　〃
5．淡灰褐色土（マンガン層）
6．　〃　（　〃　）
7．淡茶灰色土
8．　〃
9．灰色砂質土

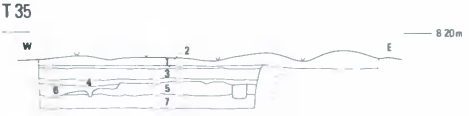
T34



T−34
1．耕土
2．淡灰褐色砂質土
3．灰色土
4．　〃
5．灰色粘質土
6．灰色粘土
7．濃灰色粘土

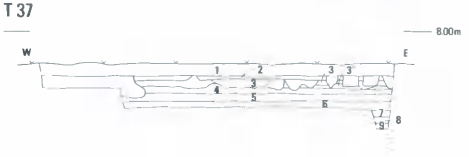
0　2m

第19図　東区平面・断面図Ⅵ（T30〜34）（1/80）

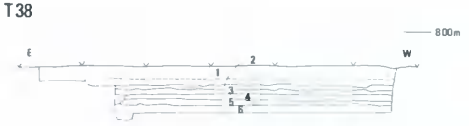


T−35
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 灰褐色砂質土
4. 灰白色土
5. 灰茶色砂質土
6. 灰色土
7. 灰茶色砂質土

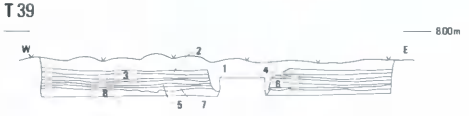
T−36
1. 耕土
2. 暗灰色土
3. 暗灰褐色土
4. 灰色土
5. 灰褐色粘質土
6. 灰黄色粘質土
7. 淡灰褐色土



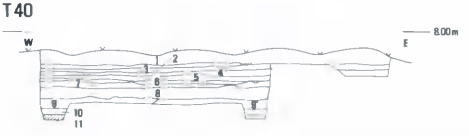
T−37
1. 耕土
2. 灰褐色砂質土
3. 暗茶褐色土
3'. 灰褐色土
4. 灰色土
5. 〃
6. 暗灰色粘質土
7. 灰色粘土
8. 灰色土
9. 〃



T−38
1. 耕土
2. 灰色砂質土
3. 〃
4. 灰白色粘質土
5. 灰色粘質土
6. 灰白色粘土



T−39
1. 耕土
2. 灰色土（床土）
3. 淡灰褐色土
4. 〃
5. 〃
6. 灰色土
7. 灰色粘土
8. 暗灰色粘土



T−40
1. 耕土
2. 灰色土
3. 〃
4. 〃
5. 〃
6. 〃
7. 灰色粘質土
8. 黄灰色粘土
9. 暗灰褐色土
10. 〃
11. 暗黄褐色粘質土（基盤層）

0 2m

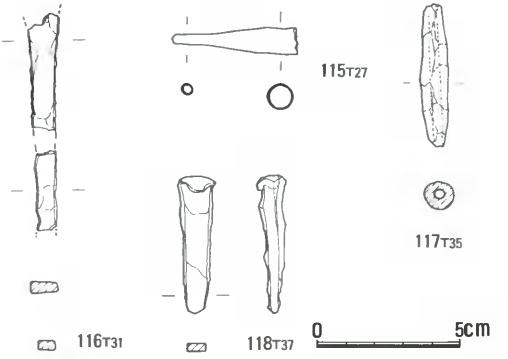
第20図　東区断面図Ⅶ（T35〜40）（1/80）

錘(117)が1点出土した。

④T36～40（第18・20・21図）

T36では表土下約80cmまで掘り下げたが、微高地の痕跡はみられず、旧河道の状況を呈していた。遺構・遺物とも認められない。

T37もT36とほぼ同様で、7層以下はT36の6層以下と対応する。灰色を基調とし、包含層は確認できなかった。2・3層上面でピット状の落ち込みがみられたが、いずれも汚れた新しい土が流入していた。その他では遺構は確認されなかった。出土遺物には、弥生土器(112)、中世土器・土鍋(111)、鉄釘(118)がある。



第21図　東区出土遺物Ⅵ（T27～37）（1/2）

T38・39は、両方とも最近の暗渠を跨いだため深掘りできなかったが、層序はT37や南西のT9・10とよく似ており、旧河道もしくは低湿地の状況を示していた。遺構・遺物はほとんど皆無に近い。

T40では、現地表下約70cm以下で包含層（9・10層）、基盤層（11層）と思われる層を確認した。部分的な断面観察でありまた湧水を伴うことから若干検討の余地も残るが、T18より下降してきた微高地がT40で極端に下がらず、T11・12の低台地部へ続くものかと推定される。遺物では6世紀後半の須恵器・杯(113・114)ほかが数点出土している。なお、遺構は確認されなかった。

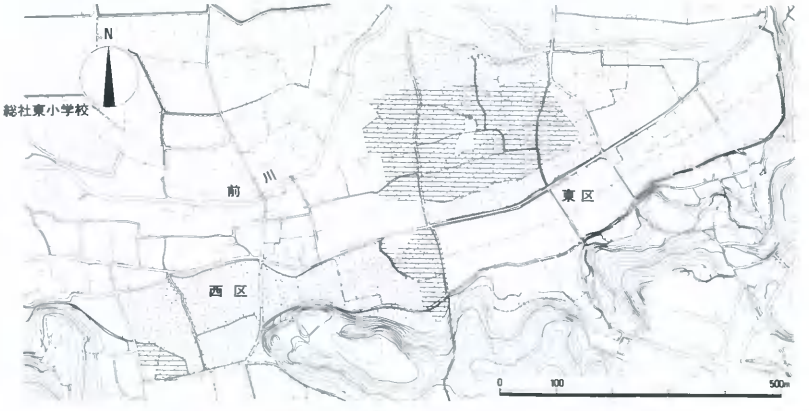
第4章　まとめ

総社市赤浜、下林ほかでは、県営土地改良総合整備事業に伴い平成元年度から国庫補助を得て確認調査を継続してきた。本年度は、その最終年次にあたり、事業予定地の西部分－前川以南を対象に行い、２×５ｍのトレンチを40本設定した。

調査の結果、３地点で遺跡を確認した。西区では、東西両端の２地点で遺跡が存在し、いずれも耕作土下の比較的浅いレベルで遺構を検出した。Ｔ２では弥生時代後期の掘立柱建物１棟ほか、Ｔ11では６世紀代の竪穴住居ほかを確認した。双方とも集落跡で、南側丘陵が沖積低地へ下がる変換点付近の舌状低位台地に立地している。

東区においては、東西に長い微高地が存在し、以前より土器散布地としてよく知られていた。微高地の中央部分は、現在墓所、神社となっており、遺存良好と思われるが、周囲は高低差1.5ｍにわたって永年の削平を受けている。にもかかわらず、微高地のほぼ全域で各時代の遺構が検出された。特に、弥生時代後期～古墳時代初頭および６世紀代の遺構が主体を占め、竪穴住居（Ｔ15～17・20・23ほか）、掘立柱建物（Ｔ14ほか）等を確認した。遺構は、西区に比べ遺構検出の困難な部分が多いが、その密度は微高地の南半が高く、北側では中・近世の遺構が若干確認された程度である。また微高地の西南の一角には奈良時代前後の遺構もみられた。

以上、今回の調査により３地点で弥生・古墳時代を中心とした集落遺跡を確認し、特に調査前の予想どおり東区の遺跡範囲はかなり広範に広がることが判明した。調査地の北には前川をはさんで、昨年度に確認調査した窪木散布地の大規模な集落跡、鉄・鉄器生産と関連の深い窪木薬師遺跡があり、また南側丘陵には巨石墳も多く、その実態が明らかとなりつつある。



第22図　遺跡範囲想定図（▤部分，アミ目は調査範囲）（1/10,000）

1．調査地遠景（東方雲上山より西方を望む）

2．T2（南から）

3．T3（南西から）

4．T11（北西から）

5．T12（南東から）

６．T13（北東から）

７．T14（南西から）

８．T14・P－１（南東から）

９．T15（北西から）

10．T16（南から）

11．T17（南から）

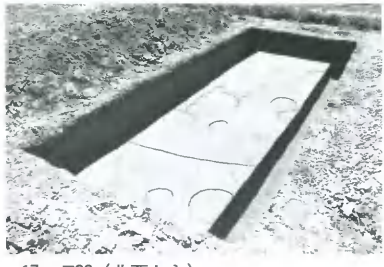
12．T18（北西から）

13．T19（北西から）

14.　T20（南西から）

15.　T21（北西から）

16.　T22（東から）



17.　T23（北西から）

18.　T24（北から）

19.　T26（北々東から）

20.　T27（北西から）

21.　T28（北西から）

22. T30（北西から）

23. T31（北西から）

24. T32（北西から）

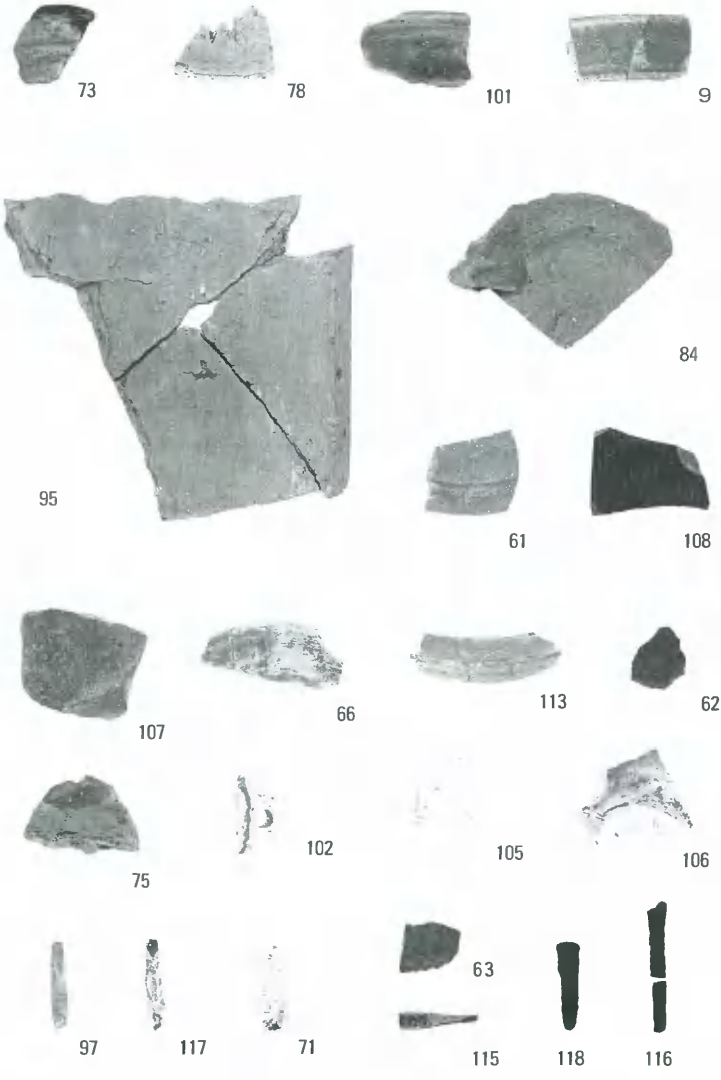
25. T34（北西から）

26. T35（南西から）

27. T36（南東から）

28. T39（南西から）

29. T40（南西から）

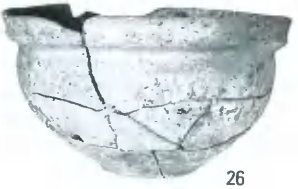

73
78
101
9
95
84
61
108
107
66
113
62
75
102
105
106
97
117
71
63
115
118
116

出土遺物 I

44

76

74


26

83

82

59

91

80

92

出土遺物II

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 85

赤浜散布地ほか

平成5年3月20日　印刷
平成5年3月31日　発行

編　集　岡山県古代古備文化財センター
発　行　岡山県教育委員会
印　刷　西日本法規出版株式会社